

「八幡平市石神地区大家齋藤家文書の整理・分析と社会学・経済史・民藝運動の領域からの再検討」

研究代表者：三須田善暢（盛岡短期大学部、准教授）、研究参加者：佐藤恭子（盛岡短期大学部、講師）、庄司知恵子（社会福祉学部、准教授）、林雅秀（山形大学、教授）、高橋正也（東北活性化研究センター、研究員）、長谷部弘（東北大学、教授）、石沢真貴（秋田大学、教授）

<要旨>

本研究は、散逸の危機にある八幡平市石神の大家齋藤家文書を整理・解読・分析することを通して、当時の社会学・経済史の研究状況を再考するとともに、齋藤家が行っていた漆器生産等の一端を明らかにすることを目的としている。史料の分析は途中であるものの、これまでの分析からは、石神調査・モノグラフの学問的問題性と齋藤家の生業の多様性が開示され、石神名子制度のいわば「近代的性格」の一端が指摘されたといえる。

1 研究の概要

本研究は、日本農村社会学の成立を画した有賀喜左衛門のモノグラフ（1939年『南部二戸郡石神村に於ける大家族制度と名子制度』）の調査地として著名であるも、散逸の危機にある八幡平市石神の大家齋藤家文書を整理・解読・分析することを通して、当時の社会学・経済史の研究状況を再考するとともに、齋藤家が行っていた漆器生産等の一端を明らかにすることを目的としている。

2 研究の内容

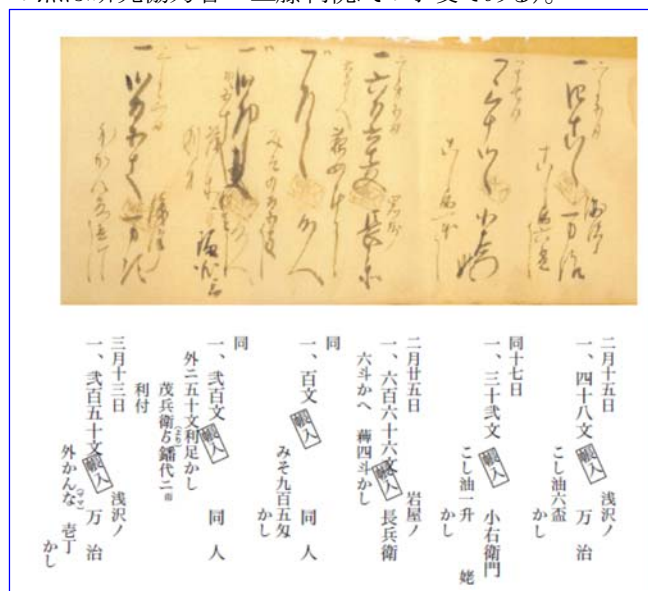
【整理・分析作業】(1) 貴重な地域資源でありながら散逸の危機にある齋藤家文書を撮影・整理・解読・分析した。当該史料は全部で、近世後期の大福帳 20 数冊および 10 箱以上に及ぶ書類であった。史料はすべてデジタルカメラにて撮影し、HD に保存して八幡平市博物館その他に所蔵している。(2) 文政 13 年の大福帳の一部を翻刻・解読した。(3) 石神地区の特徴を明らかにするため、周辺地域（二戸地方）についての経済・統計資料も収集・分析した。

【史料探索作業】(1) 石神調査を行った有賀の遺品から、石神に関連する史料を発見し、撮影を行った。(2) 民藝運動との関わりについて、新庄市雪の里情報館へ資料探索を行った。(3) 神奈川大学日本常民文化研究所との研究交流を行ない、関連史料の所在状況を確認した。

3 これまで得られた研究の成果

(1) 石神調査を行った有賀と、石神大屋当主齋藤善助および中佐井の郷土史家佐藤源八との往復書簡・調査ノートを解読してみると、これまで有賀単独の調査による著書と思われてきた石神モノグラフが、齋藤・佐藤との往復書簡による調査が大きな比重を占めていることが明らかとなった。このことは、石神調査の視点に限定があることを意味し、これまで行われていた批判（名子の視点がない、山村の要因がない等）を裏付けるものであり、狭くは日本農村社会学成立過程を、広くは生成期社会調査の方法を再検討する上で注目される事実である。(2) 二

戸地方の漆器生産は大正期に拡大し昭和前期には衰退したこと、一方で同地方の生漆生産は相対的に安定的に推移したことが、統計データや先行研究・関連資料の整理から推測された。また、二戸地方の漆器生産の盛衰と齋藤家の漆器業の変遷は必ずしも一致しないことも明らかになった。ここに石神地区の特徴があろう。(3) 文政 13 年の大福帳から「こし油」の記述を多く発見した。たとえば、「こし油一盃」「こし油一升」など（1 盃=2 合 5 勺、4 盃=1 升）。こし油はうごぎ科の落葉高木の実からとった樹脂液であり、奈良平安時代には木や革に塗ったり、鍍の固めなどに使用したとされ、「金漆」ともいわれる漆の一種であるが、中世以降の活用はないといわれてきた。しかし、大福帳に記載があることから、近世に本漆の代用品とされたことが推測される（この点は研究協力者・工藤利悦氏の示唆である）。



図：文政 13 年大福帳の一部

4 今後の具体的な展開

今回十分になしえなかった目録作成と古文書史料の分析を継続することが第一である。くわえて、民藝運動との関係性における新たな知見を見いだしていきたい。